

日本語の副詞の研究

17 ギ コー

副詞は、文を論理的に組立てるために、なくてはならない要素というわけではない。しかし、効果的なコミュニケーションという観点から考えると、言いたいことを正確に、詳しく述べたり、自分のものの見方を付加えたりするためには、非常に有効な要素である。ただ、副詞は一般に動詞や名詞に比べて、意味のとらえ方が難しい。なかでも数量、程度を表す副詞は抽象的であるために大変とらえにくい。

以下いくつかのグループに分けて、このような類似の副詞を取上げて、参考書と教科書の解説に基づいて、意味と用法の違いを分析したいと思う。

1 程度が高いことを表すもの

めっきり／とても

「めっきり」も「とても」も程度が大きいことを強調するときに使われる。しかし、「めっきり」は次のように変化の程度が目立つほど大きいときにだけ使われる。

「鈴木さんは最近めっきりやせたようだ。病気ではないだろうか」

「母の手紙によると、父はこの頃めっきり白髪がふえたそうだ」

「めっきり」が使える文には「とても」もつかえる。「とても」は程度が大きいことをいうときに使われ、変化が大きいことを表すのにも使われるからである。

しかし、変化する前と変化したあとの違いの大きさが強調されるのは「めっきり」で、上の例文でも「めっきり」のほうがふさわしい。

やたらに／むしように／いやに

「やたらに眠い」

「むしように眠い」

「いやに眠い」

(2)

なぜかわからないが、非常に眠い、普通では考えられないほど眠くて仕方がないということ、どの語も感情や欲求が度をこしている、しかもはっきりした理由もないのにと同時に使われる。

しかし、行動や物事が度をこしているときには、「やたらに」と「いやに」はつかえるが、「むしように」は使えない。「むしように」は感情や欲求の表現だけに使われる。「やたらに」はまた、次のように、行動が常識の範囲をこえているだけでなく、いかげんだと話し手が考えるときにも使われる。

「佐藤さんはやたらにおせじをいう」

「彼はやたらに子供にあまい」

「いやに」が「最近」「この頃」「今日」などいう時を示すことばといっしょに使われると、「普段はそうではないのに、おかしい、奇妙だ、どうしたのだろう」という意味になる。

ずっと／ぐんと

「ずっと」も「ぐんと」も前の事柄などに比べて、程度がたいへん高くなることを表すのに使われている。しかし、すこし、意味に違いがある。「ずっと」の方は「前に比べてとても良かった」という意味だが、「ぐんと」を使うと、「勢い」がついたように大幅に上がった」という意味を表す。

×「その一言が、ずっと胸にこたえた」

「その一言が、ぐんと胸にこたえた」

のように「ぐんと」はいえるが、「ずっと」はいえない。「～の方が」をいれて、「その一言の方が、ずっと胸にこたえた」とか、「他の言葉より」をいれて、「他の言葉より、その一言がずっと胸にこたえた」とすると、いえる。つまり、「ずっと」は比較するものがある場合に使われ、前の事より程度がたいへん強くなることを表す。

2 量が多いことを表すもの

じゅうぶん／みっちり／たくさん

「今日は十分働いた」
 「今日はみっちり働いた」
 「今日はたくさん働いた」

上の例文はどれもよく働いたといっている。「十分」「みっちり」「たくさん」は、この場合、どれも量が多いことをいっている。

「十分」は長い時間働いたという仕事の量を強調しているが、同時に、話し手が自分のした仕事に満足を感じたことも表している。つまり、どれぐらい働けばいいかという基準が話し手にはあり、それが満たされた場合に、「十分」が使われる。「たくさん」は、時間の長さや仕事の分量が多いことだけを表す。一方、「みっちり」は仕事をどれだけ一生懸命小さいところまで、手を抜かないでやったかをいいたいときに使われる。

「みっちり勉強すれば合格するでしょう」

のように、「みっちり」は、「勉強する」「研究する」「鍛える」「練習する」などのような動詞と共に使われることが多く、一生懸命何かをするときに使われるので次のような文には「十分」を使い「みっちり」は使えない。「十分寝た」というと、長時間ぐっすり寝たという満足感を表すが、「たくさん寝た」というと、睡眠時間の長さだけを述べている。

「昨夜は十分寝た」
 ×「昨夜はみっちり寝た」
 「昨夜はたくさん寝た」

3 話し手の態度・意志を表すもの

やっ／＼／何とか／辛うじて

「わずかな年金でやっ／＼暮らしている」
 「わずかな年金で何とか暮らしている」
 「わずかな年金で辛うじて暮らしている」

どの例文も、ぎりぎりの生活をしている、つまり最低のレベルで生活していることを表す。「やっ／＼」「何とか」「辛うじて」は困難な状況に精一杯対処しているという意味で使われる。

(4)

しかし、次のように文末が過去形、あるいは、完了形になると、困難な状況をのりこえて、とうとう物事が成就したということを表す。

「やっと日本語の授業がわかるようになった」
「何とか日本語の授業がわかるようになった」
「辛うじて日本語の授業がわかるようになった」

「やっと終電車に間に合った」
「何とか終電車に間に合った」
「辛うじて終電車に間に合った」

「長い時間と労力をかけて勉強した結果、日本語の授業がわかるほど日本語が上達した」
「一生懸命走って終電車に飛乗った」などという意味で、「ほっとした」という気持ちが表れている。

「辛うじて」は余裕の全くない状況で何かをするという意味なので、次のように、もうだめだと思ったことが、最後の瞬間にうまくいった、というような意味で使われることがある。「やっと」「何とか」ではこのような切迫感は伝わらない。

「車が衝突して燃えだしたが、ドライバーは車から脱出して辛うじて助かった。」

「やっと」は、また次のように、時間はかかったが、ある状況、または、ものごとが実現したという場合にも使える。この場合、努力したかどうかは問題ではない。「何とか」「辛うじて」に、この用法はない。

「やっと」はまた、まだ実現してはいないが、時間さえたてば、実現可能なことにも使われる。この場合は「何とか」も使える。

「この秋には、やっと結婚できそうです」
「この秋には、何とか結婚できそうです」

しかし、次のように、実現可能かどうかわからない場合には、「やっと」は使えない。「何とか」は使える。「何とか」は、「あれこれ方法を講じて」という意味だからである。

「何とかやってみましょう」

×「やっとなやってみましょう」

「明日でしたら、何とかお伺いできるでしょう」

×「明日でしたら、やっとなお伺いできるでしょう」

とことん／あくまで

徹底的にものごとをやりとげるといふ強い意志を表すときに「とことん」「あくまで」を使う。同じような意味が「とことん」はいつも行為を表す言葉にだけ続き、一番最後までずっとその行為をする、その「終わりまで」ということを強調する。

それにたいして「あくまで」は途中でどんな反対や障害があってもその行為を続けるという、「終わり」よりは「途中」のほうを問題にしている。

「あくまで」が状態を表す言葉に続くと、

「それはあくまで戦争を知らない人の意見です」

×「それはとことん戦争を知らない人の意見です」

のように、その人の意見はどの部分をとってみても全部が戦争を知らない人が言うような意見と、話し手が感じた事を述べた文になる。話し手の強い意志ではない。

さらに、文末に「が」をつけて、話し手の控え目な態度を表すことがある。

きっぱり／はっきり

「彼に10万円貸してほしいと頼まれたがきっぱり断わった」

「彼に10万円貸してほしいと頼まれたがはっきり断わった」

借金を断わったということだが、「きっぱり断わった」「はっきり断わった」では意味が少し違う。

「きっぱり」は「やめる」「あきらめる」「決心する」などの言葉が後に来て、どうしようかと迷ったりしない話し手の強い決意を表す。したがって「きっぱり断わった」と言えば借金を引受ける気は全然ないという話し手の強い気持ちを表す。

一方「はっきり」は、話し手の気持ちよりも「はっきり言う」「はっきり答える」のように、言い方、答え方などの態度があいまいではなく明らかなことを言っている。「はっきり断わった」は実際に断わったときの様子について述べたものである。

(6)

- このほかに「はっきり」には
- ・ものの形が鮮明な様子
 - ・あいまいさのない明らかな様子
 - ・体調や気分がよいこと
- などの使い方がある。いずれも、「きっぱり」にはない用法である。

3 予想と現実が同じだということを表すもの

たしか／てっきり

「たしか」も「てっきり」も話し手がそれまでの経験、記憶、またはほかから聞いた情報などをもとにして判断するときに使われる。しかし、「てっきり」はその判断が事実と違っていたときに使われるが、「たしか」の場合は、事実と違っている場合も違っていない場合もある。しかもどちらかということは話した時点では話し手にも分らないことがある。

「たしか始発電車は4時30分だと思った」 (間違いなくそうだった) 又は
(そうではなかった)

「てっきり始発電車は4時30分だと思った」 (しかし、4時20分だった)

「てっきり」は、話し手の判断が事実と違っていたと話し手自身が認めたときに使われるので、「～と思った」「～と思ったら」「～思ったのに」などの表現といっしょに過去形でのみ使われる。「たしか」は、現在、未来、過去のどの場合にも使える。

「たしか明日テストがあります」
×「てっきり明日テストがあると思います」

4 いつも否定形といっしょに使うもの

さっぱり～ない／いっこうに～ない

「さっぱり～ない」と「いっこうに～ない」はどちらも話し手が期待していることが実現しない時に使う。

肯定文では「いっこうに」は次のように程度を強調するのに使われるが「さっぱり」にはこの用法はない。

「いっこうに平気だ」
 ×「さっぱり平気だ」

「さっぱり」が肯定文に使われると、余分なものがなくなって気分がよくなる、またはこだわりがなくなることを意味する。「いっこうに」はこの用法はない。

「恋人のことは、さっぱりあきらめた」
 ×「恋人のことは、いっこうにあきらめた」

おわりに

以上取上げた副詞は、日本語の副詞のほんの一部である。副詞をうまく使えるにはいろいろ工夫しないとらないと思う。このように類似の副詞を比較するのは一つのいい方法であろう。日本語の勉強には副詞についての知識が非常に大切なので、これからも頑張っていきたいと思う。

参考文献

Communication Japanese Style II, III, IV(1985)
 日本語総まとめ問題集(1981)
 外国人のための日本語例文、問題シリーズ 副詞(1983)
 日語常用詞語慣用法(1978)
 新日漢辞典(1980)

東京日本語学校
 アスク講談社
 こうじゅどう
 外語教学与研究出版社
 三聯書店